



B300神殿とバルカル山



タンタマニ王墓覆屋（右手）



タンタマニ墓王彩色壁画

スーダン共和国は政治的にも経済的にも困難な状況が続いた国の一つでもある。民族、宗教、文化の違いにより南北スーダンは長期間対立関係し20年以上にわたって内戦状態にあった。また、ダルフル問題等、異なる部族、文化を持つ集団が集住する国であるがゆえの問題を抱える国でもある。

1944年、初めてスーダン考古局による発掘調査が行われて以来、同局は職員の専門性向上を常に意識しながらスーダン国内の文化財保護に当たってきた。しかし、先に述べたような政治的、経済的混乱に加え、膨大な量の遺跡と急速に進む開発などにより、専門家の不足が相まって適切な対応ができていない。近年ではナイル川沿いに数基のダム建設が持ち上がっており、メロエ期も含めた様々な種類の遺跡が水没の危機にある。



サナム神殿

(写真はすべて、関広氏提供)



サブ遺跡にて講師近影

【講師紹介】 日本に数少ないスーダン考古学者。学生時代に、イタリアのポンペイ遺跡などの調査に参加。時間を見つけては、エジプトやスーダンに行き考古研究を進めてきた。現在では、日本で発掘調査の仕事に携わるかたわら、スーダンの地元研究者らとの連携を続けている。

略歴：独立行政法人国立文化財機構 奈良文化財研究所特別研究員、スーダン・ハルツーム大学招聘研究員を経て現在にいたる。

編集・発行：愛媛大学東アジア古代鉄文化研究センター

発行年月日：2012年10月26日

HP：<http://www.ccr.ehime-u.ac.jp/aic/>



アジアとアフリカの境界で鉄に出会う

メロエ文明の鉄器生産とスーダン共和国の現状

講演要旨

講師：関広 尚世（日本オリエント学会会員）
日時：2012年10月26日（金）19：00開演
場所：愛媛大学愛大ミュージズ1階 アクティブラーニングスペース2

愛媛大学東アジア古代鉄文化研究センター

【講演要旨】

本講演では、スーダン共和国の古代史を特徴づけるメロエ文化を中心に同国の文化財をとりまく諸問題や今後の課題、またそれに関わる人々の交流も紹介することを目的とする。

スーダン共和国は2011年7月までアフリカ最大の国土を誇り、南スーダン共和国の独立後も約1,880,000km²という広大な国土を持つ（日本の約

5倍）。エチオピアから流れる青ナイルと、ビクトリア湖から流れてきた白ナイルが首都のハルツームで合流し、国土の中心をナイル川が流れる。かつては上流より雨季ごとに肥沃な土が流れ、流域には人々が集住し様々な文化が開花した。その一つがメロエ文化でありその中心となったのがメロエ遺跡である。

メロエ関連年表

	エジプト	下ヌビア	上ヌビア	シリア・パレスティナ
紀元前30年	ローマ支配時代	メロエ王国		ローマ支配時代
前305年	プトレマイオス朝			ヘレニズム時代
前700年頃	末期王朝時代(マケドニア期) (第2次ベルシヤ支配) (第25~30王朝)	ナバタ王国		ベルシヤ時代
前1070年頃	第3中間期(第21~25王朝)			鉄器時代 Iron II2 Iron III B Iron II A
前1550年頃	新王国時代(第18~20王朝)	エジプト占領時代		Iron I LB II B LB II A LB I MB II B/C
前1780年頃	第2中間期(第13~17王朝)	Cグループ III	古典ケルマ期	MB II A
前2040年頃	中王国時代(第11・12王朝)	Cグループ II A II B	中期ケルマ期	青銅器時代 MB I
前2195年頃	第1中間期(第7~11王朝)			EB IV EB III
前2670年頃	古王国時代(第3~6王朝)	Cグループ I A I B	初期ケルマ期	EB II
前3000年頃	初期王朝時代(第1・2王朝)	Aグループ	先ケルマ期	EB I
前6150年頃	先王朝時代			金石併用期
	新石器時代	ワーディ・ハルファ 新石器	カルトゥーム新石器 カルトゥーム中石器	新石器時代
	終末期旧石器時代 (エビ・パレ)			
	後期旧石器時代			

(近藤二郎『エジプトの考古学』同成社より)



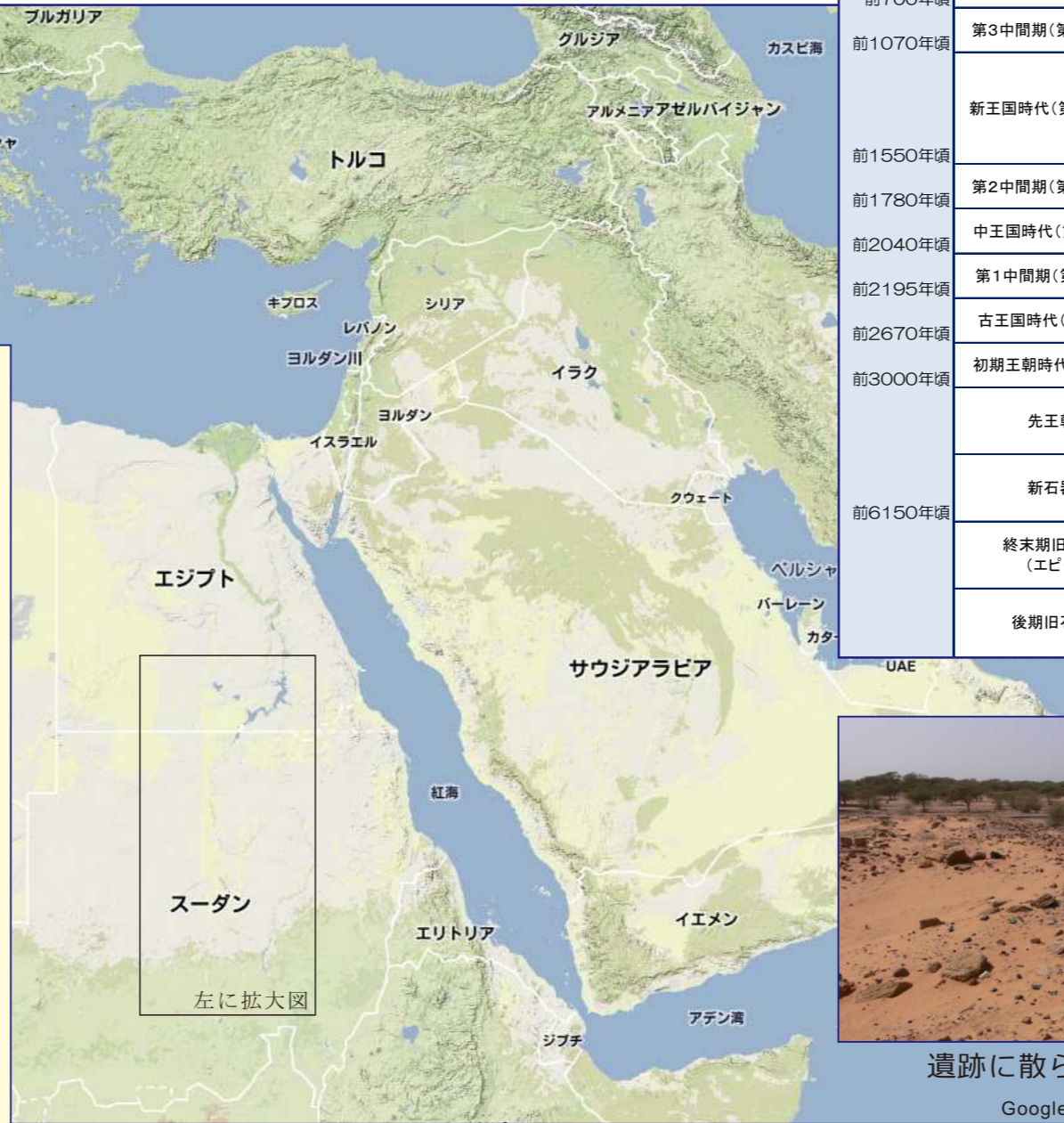
復元されたピラミッド



ナカ神殿



メロエ関連の遺跡分布図



遺跡に散らばる鉄滓



鉄滓

この遺跡が最も栄えたのはメロエ期（紀元前3世紀から紀元後4世紀）と呼ばれる時期で、遺跡内には数多くのスラグ（鉄滓）が散らばっている。20世紀初頭よりピラミッドや古代エジプトの神であるアメン神を祭った神殿や住居址の調査が進み、考古局の努力の甲斐あって2011年メロエ遺跡は、その周辺に位置するナカ神殿やムサワラト・エ＝スフラ神殿と共に世界遺産登録された。

しかし、遺跡整備は主としてピラミッド側に集中し、メロエ文化を特徴づける鉄器生産関連遺構や遺物の調査研究は断続的で、その全貌が見えていないのが現状である。メロエを初めて訪れた際、目の前に広がる「黒い石の山」に疑問を感じ、許可を得てその黒い石を日本に持ち帰った。科学分析を試みた結果、それらはスラグであった。本講演ではその成果にも簡単に触れる。